

花山多佳子歌集

『鳥影』

(角川書店)

呼ばれたと思へば娘はみどりごにおか
あさんはねと言つてをりたり

「オモチカエリデスカ」「ピッ」と言ひ

つつ幼子は吾の背中に何か押し当つ

第十一歌集。あとがきに「孫が生まれて

日常にかなりの変化をもたらした」とある

ように、娘と孫を詠んだ歌が多く詠み口の

柔らかさが印象に残る。また、タイトルに

もなっている鳥と影の歌もたくさん詠まれ

とりわけ影の歌が面白い。

ペランダに乗り出して見る いま月に

影を落とせる地球に立ちて

蝶のごとき影をおとして眼鏡あり朝の

ひかりの畳の上

地球の影という壮大なところから身近な

眼鏡の影、他に電柱や人、建物、鳥など

様々な影が様々な視点で詠まれる。

「ためし泣き」といふ言葉ゆめに出で

てきてゆめのなかでも怪訝に思ひき

真面目さゆえのユーモラスな歌も魅力。

動植物の歌は多義に渡り、時事詠もあり、

外側目々を向ける作者の好奇心が溢れ、上

質な歌の数々が楽しめる。(水上 美季)

小林久美子歌集

『アンヌのいた部屋』

(北冬舎)

待ちに待った小林久美子の第三歌集『ア
ンヌのいた部屋』は、これまでの二歌集と

は全く様相の異なる歌の姿を表している、

驚きを禁じ得ない。まず三行、あるいは四

行の分ち書きになっている。石川啄木の

歌集を思い起こしてもらえば分かりやすい。

さらに、すべての歌が三十一音である。に

もかわらず、句切れ句跨りが駆使されて

いて、定型短歌のリズムは跡形もない。句

切れ句跨りの駆使というよりは、酷使とい

う印象さえ与える。小林はこの歌集で、短

歌の韻律を二の次にして、短歌を詩に昇華

させる試みに着手したのでなかろうか。

夕立に／手渡かむ少年がいた／急勾配

の／坂の上には

積雪が／踏み台になる／裸木にのこる

／小鳥の巣を採るために

のぞむなかで知らされる／生はもとめ

る途上にしか／いられないのを

最初の二首はスケッチ風に詠まれている。

三首目は箴言のようにも思える。短歌の可

能性ということについて、思考を巡らすこ

とのできる歌集である。(鈴木 竹志)

森尻理恵歌集

『虹の表紙』

(青磁社)

「短歌という形式で綴った手記」この歌
集の一番の印象だ。

地球物理学研究職に就きながら、一人息

子を育てる忙しい日々の中で癌が見つかる。

仕事、家族、病に正面から向き合い、その

苦悩をまっすぐに表現する。

夏風邪とは一桁違う医療費をカードで

払いポイント貯めゆく

すぐに死ぬ病気にあらずば仕事して先

の子定も手帳には書く

満開の桜と小さな噴水と入学式の息子

を写す

めそめそと泣けば良いのか元氣そうと

上司は言いつつ出向切り出す

息子連れ明日また来てと医師の言う成

人であれば息子が保護者

色素沈着はたぶんこの先治らないと言

わけて夏のサンダルを捨て

この六首だけ読んで、人生がありあり

と浮かび上がってくるだろう。逆境にもめ

げず、必死に前を向く。ひたむきで懸命に

生きる女性の息づかいが聞こえてきそう。

(大西 淳子)